



読書活動への扉を開く！

No.84

桑村小学校令和6年1月26日

文責 渡邊

「感性」は、豊かな経験の中から育まれます!!

静岡新聞(令和6年1月7日)の19面に、静岡大成中・高の中山先生が、「感性育む四季の大切さ」というタイトルで、古典文学の『枕草子』を題材に「感性」について記述されていました。

「枕草子」の「うつくしきもの」の一つに、小さな塵をめざとく見つけた幼子が大人一人一人にそれを見せて回る場面があります。幼子は自分の思った通りで見つけたものを大人に見せて回るわけですが、実は大人にとってそれは大したものではありません。しかし、その愛らしい姿を見て、きっと「よく見つけたね」とか「すごいね」といった声をかけていたと思います。そうすると幼子はまた違うものを見つけては大人に見せ、新たな世界を広げていきます。これこそが感性の原点なのだと思います。「感性」は「自分の感情を大切にすること」と「自分の世界を広げること」を日頃から意識することによって、筋力トレーニングのように鍛えられていくものだと思います。だからこそ、さまざまな姿を見せてくれる四季の変化は感性に良い影響を与えているものであると感じています。(静岡新聞令和6年1月7日13面より引用)

古典文学は、なかなか学生の頃には難しく感じたことを覚えています。しかし、年を重ねるごとにその良さが理解できるようになってきました。清少納言の『枕草子』、兼好法師の『徒然草』、鴨長明の『方丈記』は、古典日本三大随筆と言われているもので、きっと保護者の方々も読まれたことと思います。

『枕草子』の原文では、前の幼子の様子を次のように著しています。

二つ三つばかりなるちごの、急ぎてはひくる道に、いと小さきちりのありけるを目ざとに見つけて、いとをかしげなる指にとらへて、大人などに見せたる。いとうつくし。

子育てを経験した今では、幼子の愛おしさが理解でき、上手な文章表現であるなど感心させられるのですが…。学生の頃は、正直難しかったですね。

さて、話を「感性」のことについて戻します。中山氏は、幼子の世界を広げていく様子から「感性」の育成について述べています。そのことと関連して思い出されるのが、私が函南町教育委員会学校教育課で指導主事をしていた時のことです。幼児教育にも携わっていて、ある園の子供が寒い日に園庭で氷を見つけ、温かな教室に持ってきました。その子は、他の遊びに夢中になっていて氷のことをすっかり忘れていたようです。そして、氷のことを思い出し近づいたら、器にあった氷が水になっていたのです。「先生、たいへん。ぼくの氷がない」と泣き出したその子に対して、園の先生は「たいへんだね。氷がなくなっちゃったね。」と声を掛け、ぎゅっとしてあげました。そして、子供が落ち着いたとき「氷はどこに行っちゃったのかな？」と問いかけたのです。「うーん。窓は閉まっているから、まだこの部屋に居るかも」とじっと器をのぞいた子は、にんまりして「水になったの？」と聞き返しました。先生もにっこり笑って「どうでしょうね」と応えました。

その子は、次の日も園庭にできた氷を器に入れて、大事そうに教室に運んできました。そして、じっと氷を眺める中、氷が水へと変わっていく様子を観察していたとのこと。それから、今度はその水の入った器を園庭に運び出し、次の日に氷ができることを確認したというのです。これってすごいことですよ。大人が答えをすぐに与えてしまえば、子供の豊かな感性は育みません。幼児教育での「遊び」は、感性を育む上でのかけがえのない学びであるのです。そして、そうした経験が小学校での学びへとつながっていくのです。



【お茶摘み体験の様子より】